

はんにやしんぎょう
『般若心経』について (二)

野口圭也 (種智院大学客員教授)

Ⅱ. 『般若心経』のテキストについて

私たちが普段、読誦したり書写したりしている『般若心経』は、中国・唐の時代の、有名な玄奘三蔵 (『西遊記』でお馴染みの三蔵法師です) によって漢訳されたものです。しかし『般若心経』は、これ一本のみではなく、他にもいくつかの漢訳が存在しています。大きく分けると、「短いヴァージョン (小本)」と「長いヴァージョン (大本)」とがあります。どちらにもサンスクリット語の原典が存在しています。

1. サンスクリット本～漢訳本やチベット語訳本の原典

A. 小本: 通常唱えている玄奘訳の原典に相当します。法隆寺の古い写本が有名です。

B. 大本: いくつかの漢訳と、チベット語訳のほとんどの原典となっています。

小本と大本の大きな違いは、小本がいきなり、「観自在菩薩行深」とお経の内容が始まっているのに対し、大本では、通常の経典のように導入部分 (序分) と結び (流通分) が付いていることです。

小本では観自在菩薩が初めから出てきますが、これは通常の経典の形とは異なります。大本では冒頭、世尊がラージャグリハ (王舎城) のグリドラクータ山 (靈鷲山) の頂に比丘や菩薩たちと共にいて、「深い完全な覚り」という三昧に入っています。その時に観自在菩薩が「深い般若波羅蜜の行」を行い、五蘊の自性が空であると照見します。そこでシャーリプトラ (舍利子) が「善男子が深い般若波羅蜜の行を実践したいと願ったら、どのように学ばよいか」と観自在菩薩に問います。観自在菩薩は、それに答えて小本にほぼ等しい内容を説く、という形になっています。そして、最後の真言を唱え終わったとき、世尊は観自在菩薩を「善哉、善哉」と讃え、会衆たちは皆、大いに歡喜して信受奉行します。

大本は経典の形として整えられていて、シャーリプトラの懇請に応じて、観自在菩薩が世尊に代わって般若波羅蜜を説く、という形式がすっきりとよく分かります。

それから考えると、大本からエッセンスを抽出したのが小本であるようにも見えますが、大本系の漢訳がいずれも小本よりも年代が下がることから、先に小本があって、それが大本に増広 (内容が増やされること) された、と現在は考えられています。

2. 漢訳～支謙が223年に『摩訶般若波羅蜜呪経』として訳したのが最初の漢訳とされていますが、現存していません。現在、仏典の集大成である大正大蔵経には以下の8本が収められています。

A. 小本系: ①のが早い訳出であることにはなりますが、本当に鳩摩羅什の訳であるか、疑問が提出されています。①と②は訳語などが微妙に違っています。②が普段唱えている『般若心経』ですが、今唱えている経文の間に、わずかな相違があります。

①姚秦・鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜大明呪経』大正大蔵経 No. 250

②唐・玄奘訳『般若波羅蜜多心経』大正大蔵経 No. 251

⑦唐・不空音訳『唐梵翻对字音般若波羅蜜多心経』大正大蔵経 No. 256

B. 大本系

- ③唐・法月^{ほうげつ}訳『普遍智^{くわんち}蔵般若波羅蜜多心經』大正大藏經 No. 252
- ④唐・般若・利言等^{りごん}訳『般若波羅蜜多心經』大正大藏經 No. 253
- ⑤唐・智慧輪^{ちゑりん}訳『般若波羅蜜多心經』大正大藏經 No. 254
- ⑥唐・法成^{ほうじょう}訳『般若波羅蜜多心經』大正大藏經 No. 255
- ⑧宋・施護^{せご}訳『仏説聖^{ぶつ}母般若波羅蜜多經』大正大藏經 No. 257

3. チベット語訳～敦煌出土の小本の訳がありますが、ほとんどが大本の訳です。

チベット大藏經^{デリゲ} sDe dge版東北目録 No. 21 (=531)

訳者は Vimalamitra と Rin chen sdeです。チベット大藏經デリゲ版には、No. 21とNo. 531の二カ所に収められているのですが、No. 21は「般若部」、No. 531は「十万タントラ部」すなわち密教經典の集成に含まれています。後にⅢ-1において説明するように、日本の弘法大師空海は『般若心經』を密教經典として解釈しましたが、チベットにおいても般若經典としてのみではなく、密教經典ともみなしていたことが理解されます。訳者の一人であるヴィマラミトラは、『般若心經』の注釈を著しています（東北目録No. 3818, 大谷目録No. 5217）。

4. 經典の成立時期～宮元啓一先生は「紀元後すぐぐらい」としますが（『般若心經とは何か』p.35）、立川武蔵先生は、紀元後300年から350年と考えています（『般若心經の新しい読み方』p.75）。

宮元説では、大乘經典が成立して、すぐに『般若心經』もまた成立したことになります。しかし「空」の思想の形成や心呪への信仰などが、最も早い時期の大乘經典に存在するか、また「觀自在菩薩」に対する信仰が、そのように早い時期に既に存在していたのか、ということについて、よく検討する必要があります。

一方、立川説では、經典の成立の方が最も早い漢訳とされている支謙の訳出よりも後ということになり、矛盾が生じます。この場合は、支謙の訳出が確実な事実なのか、またその時に用いられた原典が現在の『般若心經』と比べてどのようなものであったか、ということについて、厳密に検証する必要があります。

